

第1回『戦争体験談語り継ぎ部養成講座』 橋尾 信子 氏(H25.10.22)

～学童疎開について～

私の幼いころは戦争の連続でした。昭和6年に満州事変がおこりました。わずか5ヶ月で終わったのですが、昭和12年7月7日盧溝橋事件がおき、それを皮切りに日本と中国が戦争を始めました。その頃の私は戦争を薄々感じるだけで、戦争と言うのはどこか遠い所で誰かが戦ってくれているものだと思っていました。そして、いつか神風が吹いて、敵を吹き飛ばしてくれるものだと信じていました。

昭和16年12月8日、日本はアメリカと戦争を始めました。当時、小学校を国民学校とよんでいて、私は国民学校3年生でした。この時東條英機内閣でした。東條英機は10月18日に首相になったばかりでした。陸軍大将でもありましたから、政治は軍が掌握したことになります、日本は軍事態勢に入りました。当時発表されるものは、日本が勝っていることばかりでした。「撃ちでし止まん(討って滅ぼしてやる)鬼畜米英(戦争当時戦意高揚のために使ったスローガン)」と教えられた軍国少女の私は、日本軍が次々と占領していくフィリピンやタイ、そして南の小さな島々を地図上にずっと赤く塗っていきました。

昭和17年頃になると、戦局がおかしくなってきました。6月5日、ミッドウェー海戦で日本が惨敗します。12月31日にはガダルカナル島撤退です。昭和18年4月30日はアッツ島が玉砕しました。南の島から日本軍が玉砕や撤退をしていきました。それでも、私たちは戦略的撤退とする大本営発表を信じていました。

近所のお兄さんやおじさんが兵隊として出て行きます。玄関の前で姿勢を正して敬礼をしている兵隊を、私たちは「万歳」と叫んで日の丸の小旗を振って見送りました。始めは近所の人が総出で見送りましたが、だんだん数が少なくなってきました。そうこうするうちに、近所のお兄さんやおじさんが戦死をしました。始めは、近所の人が行列を作って、近くの神社まで見送って兵隊の英霊をたたえていました。でも、出征をする兵隊の数が多くなりますと、見送る人もだんだん少なくなっていくます。英霊の数も多くなりますと、英霊をたたえる行列も少なくなっていくました。その上、私の住んでいる町が危なくなってきました。

昭和19年6月16日、アメリカ空軍が北九州を初めて空襲し、爆弾を落としました。この頃から町に残っていた年老いた男の人や女性たちは、消火活動としてバケツに水を入れてバケツリレーや、竹槍で人を突き殺す練習をしました。6月30日、東條英機は国民学校3年生から6年生までを安全な田舎に疎開させるように決めました。田舎のある子は田舎に行きました。これが縁故疎開です。田舎のない子は学校でまとまって田舎に行きます。これが集団疎開です。残留組と言うのもありました。体が弱い子とか、ひと月10円のお金が支払えないという子どもたちです。

当時、私は神戸の国民学校6年生でした。8月21日、神戸のJR須磨駅を出発して、6年女子は旧制の龍野高等女学校に入り、疎開の生活を送りました。内閣は7月に東條から小磯内閣に変わっていましたが、戦局は厳しくなっていくばかりでした。9月20日、ビルマの日本軍が全滅しました。10月29日、神風特別攻撃隊が始めて出役しました。11月1日、サイパンの基地からアメリカのB29という飛行機が本土空襲を始めました。それ以来、東京・大阪・神戸・名古屋といった町々が焼け野原になってきます。

ここまでの集団生活の体験を紙芝居にしました。十数年前に、集団疎開の記録を小説風にまとめた「青い風はいつ」という本の要約です。紙芝居は3本ありまして、その紙芝居に登場してきます、律子・裕子・啓子・たみこは私たちの分身です。ピースおおさか(大阪国際平和センター)では平和紙芝居と言っていて、私はセンターで時々この紙芝居を読んでいます。絵は浅田ひでこ氏が描いています。「戦争はしてはいけない、戦争で一番苦しむのは子供達だ。」と訴えたかったのです。今も性懲りもなく続いている戦争に歯止めをかける小さな力になればいいと思っています。戦争は8月15日に終わりましたが、その後も長くお腹が空いたのを今も忘れることが出来ません。集団疎開という組織はその後、出来たことはありません。私たちだけが体験した記録です。その記録を紙芝居にしたのを一つ持ってきていますので、見て頂きたいと思います。

紙芝居「わかもと」をご紹介します。(紙芝居を紹介)

これで「わかもと」の紙芝居は終わります。この他にも紙芝居は2本あります。これらの紙芝居を使って皆さん方が語り継いで下さったら、本当に嬉しいと思っています。

昭和20年3月10日、国民学校卒業式の為に私は神戸に帰りました。神戸では警戒警報や空襲警報が夜も昼も出されていましたから、龍野から帰った荷物も解く時間がありませんでした。集団疎開に行っている間はお腹は空いていましたけれど、守られていましたし、空襲もありませんでしたから、平和で何もありませんでした。神戸に帰ってからの生活の方が厳しかったと思います。毎日のように警戒警報や空襲警報に脅かされ、私にとって本当の戦争になったのです。

神戸へ帰ったとたんに空襲警報や警戒警報がなくて、私たちは落ち着かない日を過ごしました。3月17日の夜にも空襲警報が鳴っていました。いつもとは違って、飛行機の爆音が頭の上を通り過ぎます。私の母と姉と3人は救急袋と防空帽をつけて、家の床下に掘ってある防空壕に入りました。上には何もなく畳の床です。それを防空壕と読んでいました。その防空壕に入って、飛行機が通り過ぎるのを待っていました。夜が明けて、空襲警報が解除され外に出ると、私の住む町はそのまま残ってありました。雲は黒く低く垂れ下がっていました。しばらくすると、近所の人が防空壕から這い出てきました。顔も服も泥がついていました。近所の人達は地べたに座りこんでいました。その日は怖い思いをしましたけれども、家を焼かれることは免れたのです。でもこの日の空襲で、同じ疎開から帰って少し離れた町に住んでいた友達は焼夷弾に当たって死んでしまいました。私は旧制女学校に入学しましたが、学校に行った記憶はありません。いつも警報に追いかけていたのです。

6月5日、大きな空襲が私の町を襲いました。町会長がメガホンで防空壕に入るように叫んでいる声を聞いて、また床下の防空壕に入っていました。今度はうなるようなB29の飛行機音、焼夷弾のシュルシュルシュルと言う金属音が頭の上を飛び交います。その度に家はキシキシと音を立てぐらりと揺れます。私たちはたまたま床下を出て、近所の防空壕に走りました。その間にもB29の音は聞こえていました。防空壕はほぼいっぱいでした。なんとか入れてもらって20人程が体を寄せ合って、B29が通り過ぎるのを待ちました。

朝になって警報が解かれて外に出ると、私の町はまだ黒い煙を上げていました。一緒に防空壕に入っていた人が「あのおばさんはあかんやろうな。」とつぶやく声が聞こえていました。その人が床下の防空壕から逃げるとき、隣の家を床下の防空壕からお経を唱える声が聞こえたので、「一緒に逃げましょう。」と誘いましたが、「お経を唱えているから大丈夫。」と言って、そのおばさんは逃げなかったそうで

す。

そうしていると、服がブスブス音を立てて煙を出している人が歩いてきました。一緒に防空壕に入っていた人が布団を抱えてその人に抱きつき、二人一緒に道に倒れ込みました。私はそこまでしか見ていません。顔を手で覆ってしまったのです。「あれは町会長さんやで。」と言う声が耳に届きました。神社の前に広がる私の町は焼け野原ですが、道に黒いかたまりが何個も転がっています。「あれ。」と私が指を指すと、母は「見ない方がいい。」と私の前に立ちふさがりました。私は姉を見上げました。「逃げ遅れた人よ。」と言ったきり、しゃがみ込んでしまいました。それは、黒焦げの死体だったのです。避難所に当てられた国民学校に行くと、教室の入り口に町会長さんが全身やけどでブクブクに膨れて椅子にかけていました。町会長さんは虚ろな目で何か呟いていました。

昭和20年4月1日、沖縄にアメリカ軍が上陸し、地上戦が始まっていました。目の前で人が人を殺すのを見るのですから、恐ろしさは私たちには想像もできません。地上戦は6月23日まで続きました。私たち親子は空襲に逃げ惑いながら、知人の家を転々としました。女学校に行った記憶はありません。

学校に行ったのは、8月15日に戦争が終わって、神戸市の市電が通るようになってからだと思います。戦争は終わったのですが、食べ物が無かったことと通学に使った神戸の市電がいつも満員電車だったと記憶が大きく残っています。私の通う女学校は神戸の市立でしたから、神戸から遠く離れた場所に神戸市の土地があったのでしょうか、私たちは市電に乗ってその土地を開拓してさつまいもを植え、収穫にも行きました。しかし、そのさつまいもを食べた記憶はありません。食べ物の恨みはひどいと言いますか、今もその記憶は鮮明に残っています。

また、女学校は焼け残りでしたが、神戸はほとんどの建物が焼かれていました。神戸市役所も焼けました。そこで、私たちの女学校が市役所として使われることになりました。神戸の市電の二つ向こうの駅に移転する小学校があったのですが、今の地下鉄湊川駅から大倉山駅まで私達は歩いて荷物を運びました。私たちが使っていた机や椅子は自分たちで運びました。地下鉄湊川駅から大倉山駅まで、蟻の行列のように市電の走る傍らをうねうねと歩きました。最低二往復はしなければなりませんでした。

私達は十分な勉強もしないまま、昭和21年12月30日に学制改革が行われ、6・3制が発表されました。女学校は新制高等学校になり、男女共学になりました。私は新制高校併設中学2年生、今の中学2年生です。それからは楽しい学生生活と言いたいのですが、思い出すのはお腹が空いていたことばかりです。戦争中の思い出として強く記憶に残っていますのは、いつもお腹が空いていたことです。それでこれから戦時中のレシピを紙芝居にしようかなと思っています。

次は、食べ物のことについて話をしようと思います。

満州事変が始まったころから、いろいろな物資が不足してきました。昭和16年4月にとうとう米の配給制度がしかれました。配給制というのは、限られた物資を国民に平等に分ける制度です。お金を払うのに、好きなものを好きなだけ買うことは出来ません。品目ごとに一人当たりの購入糧が決められ、所帯単位で交付された切符と引き換えに一回分を購入したら、次の配給日までその糧でしのがなければなりません。配給は市町村単位で実施されましたので、地域によって時間や糧はまちまちでした。その食糧品の購入は大変でした。配給は地域によって委託された小売店で行われ、家族の誰かがここに並ばなければなりませんでした。限られた食糧を買い損ねたら、次の配給があるまで食べ物が無いのです。野菜

の配給は2日に一度ぐらいです。魚は3日に一回、他の食糧や生活物資も含めたら、ほとんど毎日どこかで並ばなければなりません。1日2時間というのもありましたし、他の調査では4時間半というのがあります。こんなふうに並んでも、物資が無くなれば次の配給まで食べ物が無いということになります。それでも私は何とかここまで生きてきました。母は本当に大変だったと思います。配給は次第に種類も糧も少なく、質も悪くなってきました。そして、米の代わりにさつまいもや大豆が配給されるようになりました。

昭和17年の「主婦の友」と言う婦人誌に次のような記事が載っていました。配給食糧の使い方です。肉をまず少しの油で焦げ目が付くまで炒り焼きして、湯をひたひたに加えてしばらく煮込んでスープをとる。肉を取り出し、スープに野菜を煮込みます。肉はひき肉にするか細かく切って、野菜と混ぜて炒め直し、コロッケやさつまいもにする、というように書いてあります。

ここに配給割当表があります。砂糖は家族15人まで1人360g、小麦粉1人150g、卵2人当たり1個とあります。私は始め、「一月にこれだけかな」「どれぐらいの期間でこれだけかな」と考えましたが、それは配給から配給までの間の糧で、一回の配給で購入出来る糧です。並んでいても、品物が無くなれば買えないのです。ただお米だけは1日1人当たり成人で330gとなっています。配給米を購入するには米穀通帳が必要で、購入したらハンコを押してもらいます。お米の糧が成人で330gと大変多いように思いますが、この時代は外の副食がありません。野菜も肉も魚もありません。あるのはうめぼしぐらいですから、1人330gでも、とても栄養がいきわたりませんでした。

なぜ、こんなふうに食糧が不足してきたかという、外国からの食糧の輸入が無くなったからです。日本は男の人は戦地へ行き、女性は軍需産業に借り出され、食糧生産の力が落ちていきました。次第に、配給の糧が滞るようになり、米は玄米の配給になりました。一升瓶に玄米を入れ、細い棒で米を突くのです。夜暗い電灯の下で1時間くらい突いていたと思います。その間にも、警戒警報や空襲警報になると、そのまま打ち捨てて逃げることになります。

そのうち、人々は郊外の農家に買い出しに行くようになりました。闇と呼ばれる非合法な手段で食糧を手に入れたのです。昭和14年10月、政府は価格等統制令というのをひきました。すべての物資は政府が決めた値段で取引することになっていました。闇というのは、公定価格の何倍も、時には何十倍と言う値段で取引が行われていました。警察は取り締まりに躍起になりましたが、それなしで暮らせた人はいませんでした。その頃、「ある裁判官が自分は立場上、闇物資を食べるべきではないとしまして、とうとう栄養不良で亡くなってしまった」という報道がされたのを覚えています。「そのご家族はどうなされたかな」とその時強く思いました。

主食と同じくらい重要なのは、肉や魚や卵・大豆といったたんぱく源です。真っ先に厳しくなったのは肉でした。戦争が始まって以来、肉は贅沢品として扱われました。毎月2回「肉無しデー」が設けられ、肉屋はお休みです。レストランは肉のメニューが出せなくなりました。肉の配給は月に一度、糧は1人37g、卵は2人で1個、頼みの魚介類の配給は6日に一度ぐらい。何時間も並んで手に入れた魚は1人多くて100gぐらい、いわしなら1人2尾ぐらい、切り身ならば5人で3切れ程度です。種類も限られてきて、魚介類の配給はいかのころ多かったです。いかのわたも白子も食材として、料理法が婦人雑誌に掲載されるようになりました。冷凍技術がありませんでしたから、するめや干しいかの形で配給が行われました。その他、貝類も乾燥されて配給されました。婦人雑誌のレシピはめざしの蒲焼、サメのステーキといった名前もあります。その他、なま大豆粉というのがあり、脱脂大豆を乾燥させた粉と思われます。これ

は小麦粉の代用品として使われました。これより少しましなのはうの花でした。ご飯に炊き込み、そばろにしてどんぶりにする、ハンバーグのつなぎにするなどです。

しかし、昭和18年ごろになりますと、婦人雑誌のレシピのページが減ります。カラーページが消えていきました。そして変わりに登場したのは、「さつまいもの作り方」とか「空き地にかぼちゃを植えましょう」という記事でした。日本中の空き地はさつまいもやかぼちゃの畑になりました。野菜も丁寧に料理をしてゆっくり味わうという悠長なことは言うてはいられません。戦争末期には、野菜は生で食べろと婦人雑誌に書かれるようになりました。理由は、「洗ったり、煮たりすることで貴重な栄養源が失われ、煮減りがする」というのです。そのうえ、枯葉、根、皮などを捨ててしまうことになります。さらに茶殻の中にはたんぱく質があって、ほうれん草に負けない葉緑素が残っているから捨ててはいけないと書かれるようになりました。少し疑問ですが、そう書いてありました。

ついには、道端の雑草が新鮮な野菜とされました。警報が激しくなり町が焼け野原になりますと、婦人雑誌に次のような記事が載りました。「主婦自身の手で道端の土を掘ってかまどを作り、ありあわせの器をかけて、温かい戦場食の煙をあげましょう。」「平素心がけてとっておいた非常貯蔵食品が役立つ」と昭和20年2月の主婦の友に載っています。こういうふうな厳しい食糧事情を過してきました。そして栄養不良も経験して、なんとか今まで生き延びることが出来ました。